

11.1 博覧会のプロセスを通じたレガシーの結実

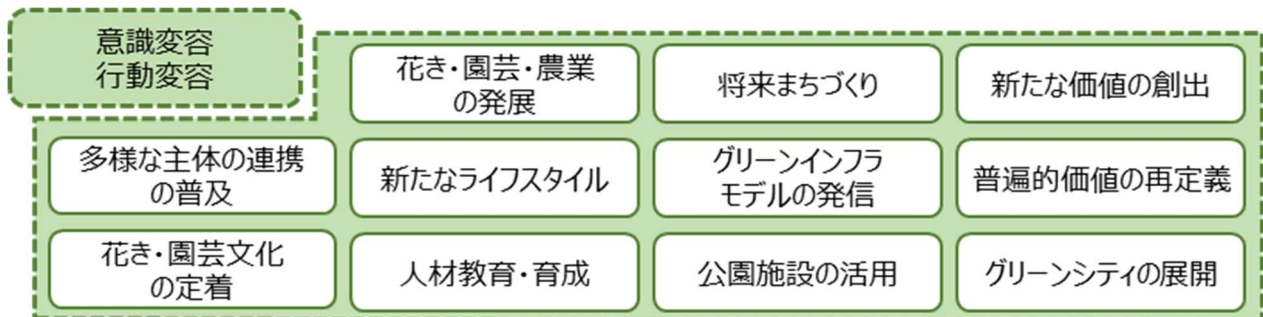
博覧会におけるレガシーは、テーマの実現に向けた博覧会における取組のプロセスの中で紡がれ、未来に繋がっていく。計画段階から、テーマを展開する各サブテーマから想定されるレガシーの方向性を描きながら、博覧会のプロセスを通じて結実させていく。

11.2 テーマを展開するレガシーの方向性

博覧会の開催前～開催～開催後を通じた多様な主体の連携により、「参加者自らが作った博覧会」という意識を醸成し、その連携による熱意や、意識変容・行動変容に繋げる。

多様な個の主体的な行動につながる意識変容・行動変容をひとりひとりのレガシーとして心に残すとともに、個の主体的な行動が連携につながり、博覧会を契機とした取組をレガシーにつなげる。

多様な主体の連携による取組が、博覧会が行われたことを象徴する公園施設やアートなどを有効活用しながら街全体へ継続・発展されていくことや、日本・横浜をモデルとしたグリーンシティの展開など、レガシーの方向性を想定しながら、本博覧会のプロセスを進める。具体的には、以下の11の方向性を想定している。



【テーマを展開するレガシーの方向性】

- ① 花き・園芸・農業の発展
 - ・花き・園芸・農業の各産業に関わる人々が本博覧会を積極的に活かし、博覧会閉幕後にビジネスとして開花させ、新たな産業群を創出するなど、本博覧会を契機として第5次産業革命を牽引する。
- ② 将来まちづくり
 - ・上瀬谷地区においては、本博覧会の開催に関わった人たちが中心となり 2050 年の社会を見据えた、先進的なまちづくりに向けた取組が進むほか、横浜市においては、市の発展の中心である都心臨海部と「花・緑・農と私がつながり、生命と活力が溢れる未来」を生み出す郊外部が両輪となった都市の未来像が築き上げられ、国内外から多くの人々が横浜市を訪れる。
- ③ 新たな価値の創出
 - ・Society5.0 への進展や COVID-19 の影響などにより生まれた価値観の変化を、本博覧会会場での

様々な体験を通じて来場者に感じ取っていただくことで、園芸分野以外においても新たな価値の創造への取組の誘発を目指す。

- ④ 多様な主体の連携の普及
 - ・本博覧会で展開する多様な主体の連携による成果を持続的に情報発信するとともに、博覧会閉幕後も本博覧会のレガシーとなる組織や本博覧会に参画する市民団体などが連携する場を確保し、国内外に向けて意識啓発活動を展開する。
- ⑤ 新たなライフスタイル
 - ・本博覧会で提案する、自然とのつながりの大切さ、住居に近いエリアに目を向けた行動様式のあり方に共感した人が、新たなライフスタイルを実践する。
- ⑥ グリーンインフラモデルの発信
 - ・本博覧会で提案する、グリーンインフラのプロトタイプを博覧会閉幕後も継続的に体験・体感することができるようにすることで、国内外に対して、郊外部の活性化の都市モデルとして持続的に情報発信し続ける。
- ⑦ 普遍的価値の再定義
 - ・SDGsの目標が2030年となっている中で、2050年に向けた新たな持続的開発目標の設定に向け、本博覧会を通じて得られた世界からの叢智や、提言などを踏まえ、2050年さらにはそれ以降の社会の持続性の実現のために必要とされる、普遍的価値の再定義に受けた提案を行う。
- ⑧ 花き・園芸文化の定着
 - ・大阪花の万博の開催後に定着したガーデニングのように、本博覧会の来場者や、本博覧会に関する情報発信に触れた方が、「花き・園芸・農業等に関する文化」を一過性のブームではなく、持続的に生活に取り入れる。
- ⑨ 人材教育・育成
 - ・本博覧会のターゲットイヤーとなっている2050年にとどまらず、その先の国内外の農業・園芸を担う国内外の人材を育成する機関が整備され、知識・経験が受け継がれる。
- ⑩ 公園利用の活用
 - ・博覧会が行われたことを象徴する公園施設やアートなどを有効活用しながら、街全体へ多様な主体の連携による取組を継続・発展していく。
- ⑪ グリーンシティの展開
 - ・AIPHが推進する「グリーンシティ」の概念の普及啓発と社会実装の実現支援に向け、レガシーとなる組織を起点に持続的な活動を行う。

11.3 博覧会レガシーとしてのグリーンシティ

本博覧が目指す将来まちづくりのテーマとして掲げる「心の豊かさや幸せがあふれる持続可能なグリーンシティ」を郊外部活性化の都市モデルとして横浜で実現し、レガシーとして世界に向けて発信するため、横浜の市民力を発揮したグリーンコミュニティの醸成やグリーンインフラの実装を見据えた開催準備段階からの産学官連携や整備調整を行っていく。

11.3.1 グリーンインフラの更なる発展

博覧会で実装したグリーンインフラの質をさらに発展させるため、グリーンインフラの要素技術の開発とその情報発信を行うとともに、自然との共生を支えるコミュニティ醸成の場として、自然と触れ合う様々な体験や環境学習の場を提供する。博覧会では、開催準備の段階から多様な参加ができるよう計画しており、博覧会を通じて形成されたコミュニティが、将来公園や近隣の農地においても継承され活動が継続していく。さらに、上瀬谷地区のグリーンインフラを発展させる官民連携の取組として、グリーンインフラ推進協議会を設立し、取組を国内外に発信する。

11.3.2 グリーンコミュニティの醸成

博覧会の開催都市の横浜市には、2021年現在、公園や水辺、道路などを維持・管理する約4千団体もの地域のコミュニティが活動しており、街をみんなで良くしていこうとする素地がある。本博覧会ではこの素地を活かし、Villageにおける準備活動などを通じたコミュニティの再構築（テーマに関心を持つ市民の参加促進や新たなつながり）を図ることで、コミュニティの多様化・高度化を進め、博覧会のレガシーとして継承し、よりよい未来を創る主体（グリーンコミュニティ）を育てていく。



グリーンインフラのイメージ（グランモール公園）



植物管理や環境学習のイメージ

11.4 将来公園における博覧会レガシーの展開

本博覧会会場の一部は、将来公園として広く市民に利用される。博覧会のレガシーを継承する拠点としても、公園施設の在りようは重要な位置づけにある。博覧会で目指す未来像を取り入れた公園整備を実現するためにも、博覧会事業は公園整備と連携して取り組んでいく。

11.4.1 花き・園芸・農業の発展

本博覧会での取組を継承し、花き・園芸・農業の国際コンペティションの日本開催を定着させ、上瀬谷アワードの世界的なブランド化を目指し、日本の花き・園芸・農業の発展に繋げる。

コンペティションの開催会場として、博覧会時に公式参加者（国、国際機関）が利用する「屋内展示施設」を公園施設として整備し、出展の記憶を継承するとともに、施設に併設される温室において博覧会の「種」ミュージアムを引継ぎ、国際コンペティションにおける優良品種の保存や、花き・園芸・農業関係者への種の提供を通し、上瀬谷を起点とした花き・園芸・農業の定着を目指す。

11.4.2 新たなライフスタイルの定着

博覧会で提案する「農のある暮らし」を、上瀬谷の雄大な自然環境や農の風景をバックに、博覧会で小催事場として利用する環境と共生した建築を公園施設として整備し、博覧会後もオフィスや交流拠点として活用するとともに、会場内に実験的に導入する高速情報通信環境を活かした、日常の中に自然や農を積極的に取り入れた、都市近郊における「農のある暮らし」を上瀬谷で定着させていく。

11.4.3 農の心を浸透させる「ファーミング（Farming）」の振興拠点

上瀬谷地区の特徴であり、博覧会においても重要な要素である農について、公園内や周辺農地との連携による収穫体験や栽培研修など農と触れ合う場を提供することで、人々が自身の身近な生活に農を取り入れるファーミングを流行させるとともに、文化として根付かせることで、まちの中に農を浸透させる。また、農福連携の実践の場としてインクルーシブな社会の一翼を担う。



コンペティションのイメージ



収穫体験のイメージ

第12章 スケジュール

2021年にBIE（国際博覧会事務局）との申請に係る協議を開始し、2022年に承認を得られれば開催が決定する。開催決定後、各国等に参加招請を行っていく。

会場計画に係るスケジュールについては、関連する将来まちづくりの事業と調整を行いながら、設計を2022年度から2023年度、整備工事を2024年度頃より着手を想定する。

年度	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027
国際園芸博覧会	閣議了解 BIE申請協議	閣議決定 BIE申請承認					3~9月
	博覧会協会設立	会場計画・設計 参加招請等		工事			国際園芸博覧会開催
	土地区画整理事業	設計等	工事				
都市公園事業	設計等	工事					
都市計画道路の整備	設計等	工事					
新たな交通	設計等	工事					

【スケジュール】